連載Ⅱ
ホスピタリティーの
手触り 74

ベッドの悦楽、畳の美学

旅行作家　山口　由美

ホスピタリティー産業で新たな融合のステージへ

旅に何を持って行くかは、旅のスタイルや、旅人の信条ばかりでなく、旅の背景となる時代を鮮明に映し出すことがある。

一八七八年（明治十一年）、まだ「江戸」と呼ばれていた東京から東北、さらに北海道を目指して旅立った英国の女性旅行家、イザベラ・バードが『日本奥地紀行（Unbeaten Tracks in Japan）』に記した旅支度には、興味深いものがいくつか登場する。なかでも目を引くのがこの記述だ。

そして最後に最も大切な寝台。これは軽い柱をつけたキャンパス台で二分間で組み立てることができる

なんと、折り畳み式の寝台を持って旅していたのだ。これは、彼女がことさらに神経質だったからではなく、当時の西洋人の、西洋式の宿が望めない地域の旅行では標準的な装備だった。それでも、食料は現地調達を基本とした彼女の旅支度は、同時代のほかの旅人に比べれば、ずいぶんと身軽なものといえた。それでも、これだけは欠かせないという必需品が寝台、すなわちベッドだったのだ。

いつだったか、旅行かばんのブランドとして有名なルイ・ヴィトンのビンテージ商品の一覧の中に、折り畳み式ベッドというのがあって驚いた記憶がある。かつて異文化の土地に旅立つ時、西洋人は、何はさておきベッドを持参したのである。

裏を返せば、西洋人を相手にした宿、すなわちホテルにおいて、何よりも必要なものはベッドだったことになる。

イザベラ・バードは北に向かう旅の途中、日光で一軒の家に滞在した。その美しい佇（たたず）まいを彼女が絶賛した屋敷の主は、東照宮で雅楽の奏者をしていた金谷善一郎という、サムライであった。

近ごろ彼は、収入を補うために、これらの美しい部屋を紹介状持参の外国人に貸している。彼は外国人の好みに応じたいと思うが、趣味が良いから、自分の美しい家をヨーロッパ風に変えようとはしない

『日本奥地紀行』に「金谷家」と記されたこの家が、日光金谷ホテルの前身、金谷カッテージインであった。

金谷カッテージインの創業、すなわち善一郎が外国人に部屋を貸し始めたのは一八七三年（明治六年）である。その年をもって、しばしば金谷ホテルを日本最古のホテルと呼ぶことがある。

だが、ベッドがあることをホテルの条件とするならば、イザベラが部

屋の美しさを絶賛しながらも、これだけは譲れないと折り畳み式ベッドを広げたのであろう金谷家は、やはりホテルではなかったことになる。

そうした歴史を考えると、一九三〇年（昭和五年）開業の甲子園ホテルに登場した畳のある和洋室は、いかに画期的な発想だったかが分かる。甲子園ホテルとは、わずか十四年で短い歴史を閉じ、今は武庫川女子大学のキャンパスとして保存されている伝説のホテルである。

アイデアを思いついたのは、開業時の総支配人、林愛作であった。帝国ホテルの中興の祖として辣腕（らつわん）を振るった林は、旧ライト館の設計者、フランク・ロイド・ライトを招聘（しょうへい）した人物でもあった。甲子園ホテルは、ライトの弟子として帝国ホテルに関わった建築家、遠藤新（あらた）と組んだプロジェクトだった。

「豊年虫」8客室のうちの1つ「蘭」

（写真提供：
信州戸倉上山田温泉 笹屋ホテル）

林は、甲子園ホテルを「日本人による、日本人のためのホテル」と位置づけたという。そのコンセプトの表れが、洋室のリビングに畳敷きの和室を組み合わせた和洋室だったのだ。昭和初期、都市部のモダンな住宅には、洋室の客間やリビングが設けられるようになったが、プライベートな寝室などは畳の和室というのが一般的だった。林は、そうした当時のアッパーミドルの日本人が居心地よく過ごせるホテルを目指したのである。

この部屋は評判を呼び、信州戸倉上山田温泉の笹屋ホテルという旅館が、遠藤新に新館の設計を依頼した。現在も、「豊年虫（ほうねんむし）」という名称の登録有形文化財として現役で使われているこの部屋が、後に日本の近代旅館における客室のひな型になったといわれている。畳の座敷に板の間のリビングを組み合わせた部屋は、私たちが日本各地で当たり前に目にする、典型的な旅館のスタイルである。だが、江戸時代にこんな部屋はなかったわけで、これは林と遠藤による革新（インベーション）だったのだ。

かつて西洋人は、生活の基本としてベッドにこだわり、一方、日本人は畳にくつろぎを感じてきた。しかし、ライフスタイルが欧米化した今、日本人もベッドのほうが楽になり、一方、日本文化に対する興味と理解が成熟した外国人は、むしろ、畳の部屋に寝ることにエキゾチシズムを感じている。時の流れとは不思議なものである。

そして、旅館における和と洋のコラボレーションは、今、むしろリビングを和室とし、寝室をベッドにするのが主流となっている。日本文化を演出する客室に畳の美学は不可欠だが、寝室はベッドのほうが快適ということなのだと思う。かつてホテルと旅館に一線を引くものであったベッドと畳は、日本のホスピタリティー産業で、新たな融合のステージに入ろうとしている。

（やまぐち　ゆみ）